

人生ハンド仏句

第153号

H. 26. 12. 1

(毎月1日発行)

聞く耳

住職 谷川寛俊

体のあちこちに欠陥が目立ち始めた昨今、約七年前より時間があれば、筋力の衰えや足腰の衰えを鍛える為に「ジム」に通っていますが、私の場合、近頃耳が少々遠くなってきた様な気がします。テレビの音量も家の者から苦情を言われる程に大きくしないとよく聞こえなかつたり、家族やひと様と話をしても、「えっ、えっ」と何度も聞き直したりする始末です。(自然現象とはいえ、いやはや困ったものです) しかし、そうやって初めて「聞く耳」を持つことの大切さに気付かされました。孔子は、「六十にして耳順」と仰せになりました。辞典を紐解けば「耳順」とは「齢、六十歳を迎えるようになれば、他人の意見に反

発を感じることもなく、腹を立てることもなく、素直に耳を傾けられるようになるものである。」という意味だそうです。そう教えられて我が身をしみじみ見つめれば、そんな孔子の境地などからは、はるか遠いところで右往左往している己に気付かされてしまいます。それどころか、年々歳々、自尊心ばかりが強くなり、自己顕示欲ばかりが旺盛になつてるよう反省しきりです。又孔子は、良薬は口に苦けれども、病に利あり。忠言耳に逆らえども、行なうに利あり。つまり、良い薬は飲むと苦いが、病を治す効力がある。忠言というものは、なかなか素直に聞けないが、役に立つものである。という金言もあります。はてさて、この私はどうしたら忠言を忠言として聞くことのできる耳を養うことが出来るのか、またその為の耳を肥やすことができるのか、

「人生ハンド仏句」

と打ち込んで頂けば、ホームページにつながります。

編集・発行

玉蓮山 真成寺

編集部 谷川久仁子

TEL・FAX 0765-22-2268

携帯 080-3744-2523

こちらの番号でもお寺につながります。

誠に不安であります。

忠言を聞いて、その心を「閉ざす」のか「聞く」のかでは、全く結果は違ってきます。

更には、我が日蓮大聖人様の教えの中に「変毒為薬」という教えがあります。

言うまでもなく「毒」と「薬」は紙一重です。

皆さんもご存知の通り、ケシの実からは医療品としての「モルヒネ」が採れます。またケシには鎮痛・麻酔薬としての働きの他に、呼吸鎮静作用等々、約四十種類にも及ぶ有用な成分が含まれていると言います。

しかし、それは時に人間を狂わせ、死にまで至らしめる「アヘン」や「ヘロイン」といった麻酔薬でもあるのです。ここで大切なのは、同じ素材をどのように有益で効果的に活用するかという智慧の有無であります。

およそ、「佳き声」とは必ずしも自分

にとつて、「都合のよい声」ばかりではありません。「不都合な声」を聞き取ることは中々難しいことであります。だからこそ「忠言」は耳が痛く、耳に逆らうことが多いものだと思います。「良薬」もまた「口」に苦しなであります。

今更言うまでもなく、「毒」を変じて「薬」とするということは決して容易なことではありません。

「変毒為薬」にとつて、何よりも大事なことは、自由自在な心を育むことであるようにも思われます。

その為には、常日頃から心地よい音を聴くトレーニングを積み重ねることが必要不可欠です。そして、その為の最上のトレーニング法として、「読経」と「唱題」という何物にも優る強力な修行方法があるのです。

